

## ヘルマン・ヘッセの『シッダルタ』

「蝶の雑記帳 119」

これまでにいったい、不可思議な人間の生から解脱して、悟りに至る過程を見極め言葉に表現した書物があつただろうか。ごくわずかな仏教の経典・論書・解説書、中国の禅語録や道元の『正法眼蔵』などを読んだけれども、どこにも具体的な悟りの奥義は書かれていない。キリスト教の新旧の『聖書』やイスラーム教の『クルアーン』も、すでに存在する神の現われと預言を記述したものとされるから、ただその教えを説いて「信じなさい」という命法を示すだけで、解脱とか悟りとかがどのようにして得られるかを解説したりしない。それほど、人生で出会う苦しみから解脱する方法と、悟りに到達するやり方を明確に説明することは困難である、と考えなければならない。

そんな困難な仕事を遂行したのがヘルマン・ヘッセの作品『シッダルタ』である。小説という形式がそれを可能にしたにしても、たいへん大胆な試みである。今から 100 年前ころヨーロッパは、自分たちが先頭をきって切り開いてきた近代が審問に付される状況に向き合っていた。ヨーロッパ人に問いを突きつけた最大の出来事は、戦場となったヨーロッパでかつてないほどの戦死者を出した第一次世界大戦であった。そういう状況の中で、長く自身の精神的な葛藤に向き合って、普通の人が思い浮かべないような思索をするヘッセの文章

が生みだされた。40代になったヘッセは、代表作の一つ『デミアン』を著して、深く自己を見つめ人間の生を探求する道へ進む。さらにインドの思想に取りくんで、40代終わりにはこの作品『シッダルタ』を著す。

この小説は第一部と第二部に分かれている。予備知識なしに読み進むと、青年期を描く第一部に主人公シッダルタとは別の悟った人ブッダが登場し、ゴータマという姓で呼ばれる筋立てに出会う。主人公シッダルタはゴータマ・ブッダとは別の人物として描かれるのだ。すでに悟った人ゴータマがどのようにして悟りに至ったかは語られない。作家は、同じ名をもつシッダルタがどのような人生行路をたどるかを語ることによって、解脱あるいは悟りを考えようとするのだ。

小説を分析的に読むのは小説を味わう者のすることではないが、すでにそれをやり始めている。じつはこのところわたしの関心は仏教思想を見極めようとするところにあるのでやむをえない。小説から離れて、悟りとその考え方を問題にすることになるだろう。

導入部に、「ヴェーダ」の詩句にふれて、「人間は、深い睡眠に沈んだ時に自己の最深の内性に帰り、真我(アートマン)の中に住む」と書かれ、それについてシッダルタの考えが次のように示される。——しかし、これらの最奥の知を、単に知り得たばかりでなくおのれに生かすことのできたバラモ

ンは、どこにいるだろう。そういう僧侶、賢者、もしくは贖罪者はどこにいるだろう。真我なる故国にもどってそこに安らう思考の時を、眠りの中から、醒めた時へ、日常の生活へ、歩ごと歩ごとへ、言葉と行為へ、誘い出し現出することのできる妙なる力をもった達人はどこにいるだろう—— と。この問いがこの小説のすなわちヘルマン・ヘッセのテーマであることがおいおい分かってくる。

利発なシッダルタが若くして出家者(沙門)たちの中に入って苦行を始めると、幼いころからの友ゴヴィンダも行を共にする。何年か修行をつんだシッダルタは、友に上と同じ趣旨の言葉を発する、—— 我々の老師はもっと高齢になっても涅槃には達することがないだろう。我々も、この世に生きるありとあらゆる沙門のうち、おそらく一人も、ただの一人も、涅槃に達する者はないだろう—— と。この問題をこの小説はどのように描くのだろうか。

三年修行したころ二人は、ゴータマと呼ばれる崇高者・仏陀が出現したという風説を聞いて、ブッダと弟子たちのいる祇園へ行く。そしてシッダルタは、その教説を聞いて、ゴータマがほんとうに目覚めた人・ブッダであることを知る。シッダルタはブッダに会うと、—— おお、至高の尊者よ。世尊の御教えでは、いっさいが完全に明らかであり、明瞭に証示されております。完全な、けっして中断されることのない鎖、因と果より成る永遠の鎖として世尊は世界を示し給うので

ございます——と賛嘆する。ところが、続けて重大な疑問を  
発する、——しかしながら、同じ世尊の御教えに従いますと、  
あの万物いっさいの統一と整合が、或る一つの点で中断され  
ております。… その或るものとは世界の克服、解脱について  
の世尊の御教えです。この小さな隙間により、永遠にして統  
一せる世界法則の全建築が再びこわされたのでございます  
——と。

二十世紀の知的な作家は、さらに、シッダルタに次のよう  
に言わせる、「世尊は死よりの解脱を得られました。世尊は  
それを、世尊自らの求道により、世尊自らの道程により、瞑  
想により、沈潜により、認識により、開悟によりえられたの  
でございます。教義によって世尊はそれをえられたのではご  
ざいませぬ。そして、——これがわたくしの考えでございます  
。おお、尊者よ——何人も解脱は言葉と教義によって、世  
尊の成道の瞬時に世尊の心に起こり給いしことを、伝えまた  
語ることはできないのでございます」と。

なんと鋭い問題発見だろう。近代以前にこういう問題を明  
確に指摘した人があるかわたしは知らない。十九世紀の作家  
トルストイは、晩年に廻心して真正のキリスト者になろうと  
した。以前の著作を不完全なものだったと反省し、「ロシア  
民話」で神のなす奇跡を感動的に記述した。それとくらべれ  
ば、二十世紀のヘッセの描こうとするテーマはずいぶん別の  
ものに見える。宗教観に大きな違いがあるのかもしれない。  
ヘッセがインドの思想に深く身を投じていることが、両者を

分かっているのだろう。

第一部最後の節のタイトルは「覚醒」である。シッダルタは、—— 真我をわたしは求めた。梵(ブラフマン)をわたしは求めた、あらゆる殻の核心、真我、生命、神性、究極なるものを探り取ろうとしていた。しかもそのときわたし自身というものは、わたしの手から逃げ去ってしまっていた —— と反省し、そのやりかたではだめなことに気づく。—— もうわたしは真我や世界苦相手にわたしの思索や生活を始めるようなことをしない。もうわたしは自分を殺したり砕いたりして、そのかけらの中に神秘をさぐるようなことはしない。もはやヨーガ経に教えは受けないアタルヴァ・ヴェーダにも、苦行者にも、いかなる教えにも教えは受けない。わたし自身を師にしてわたしは学ぶのだ、わたし自身の弟子となるのだ、そしてわたし、シッダルタという秘密を知ることを学ぶのだ —— と覚悟を決めることによって、彼の覚醒は始まる。

覚醒の最初の言葉が発せられる、—— 人が書物を読んでその意義を求めようとするとき、かれは一字一字たどってそれを読み、学び、愛するのだ。しかるにわたし、世界という書物と、わたしという書物を読もうとしたわたしは、あらかじめ自分の予想した意義に捉われて、その記号と文字を軽蔑した、世界を現象の迷妄と呼び、わが眼、わが舌を偶然で無価値な仮象と呼んだ。否、そのことはもう過ぎ去った、わたしは目覚めた、わたしは真実目覚めた、今日始めてこの世

にうまれたのだ —— 。

—— 真に目覚めた者であり新たに生まれ出たものである彼は、彼の生活を新たに、完全に初めから始めねばならないのだ ——。シッダルタに、いまやまったく新しい視界が開ける。

このように第一部が終わるのを知ってわたしは、この小説の構想を理解できたと思った。この小説を成り立たせる骨格は、深い思索から生みだされたにちがいない。その構想からすれば、物語の聞きどころは第二部にあるはずだ。小説が成功するかどうかはその語りにかかっている、そこで作家の力量があらためて試されるのである。第二部は、覚醒したシッダルタがどのような生活をするか、解脱へと至る過程となるその生活を描ききらなければならないだろう。

\*

第二部冒頭は、「シッダルタは彼の進む一歩ごとに新しいことを学んだ、世界は一変し、かれの心はあらゆる魅力に開いているのだ。……」と始まる。眼に見える世界は本体ではなく本体は彼岸にあるとしていた考え（それはつまりインド古代のパラモン教の思想である）から脱し、今や彼の解放された眼は此岸を逍遥する。

彼は考える、… 自分自身を今や体験しなければならない、… たしかに肉体が自我ではない、しかし思索とても自我で

はない、… この思考の世界もやはり此岸のものなのだ。… 感覚という仮我を殺し、そのかわりに思考学識という仮我を肥らせても、それは結局なんにもならないのだ、感覚と思考の両者から最奥者の秘声を聴き取るべきなのだ。この秘声が彼に留まれと告げる場所の他には、彼はどこにも留まるまい、そう彼は考えた。… 彼は、禁欲、犠牲、沐浴ないし祈祷、食と飲、眠りと夢、それらのいずれの道をも選ばなかった。彼はその声に従ったのである。このように、外からの命令に従うことなく、肉の声に聴き、進んでそれに応ずること、それが善なのである。必須のことなのである、他の何ものも必須ではない。

ここで示されるシッダルタが進もうとする道は、すべての宗教を奉じる諸国で深く思索する人に通底する考え方だったかもしれない。しかしそれは、とりわけ近代人に明瞭に意識されるようになった考え方だ、とわたしには思われる。それに対して、この段落より前に示された考え方の中核は、古代インドの思想に固有のもので、人格神に帰依することを勧めるキリスト教とは隔たりがある、と思う。キリスト教世界に育ったヘッセは、キリスト教の考え方から離れてインドの思想に近づいた、と考えてよいのだろう。ただし、ヘッセは、バラモン教にある真我(アートマン)と梵(宇宙の根源)の思想を根本にすえていて、それらに疑問符を付与したゴータマ・シッダールタの思想との差異を無視している。その点がわたしの関心事であり、あとでとりあげて考えよう。

さて、ヘッセが考える解脱への道がどのようなものが提示された。ここからの物語は、要約と言える上の考え方から織り出されるヘッセ流の語りということになる。

実現された解脱を十分に語るには、目覚めた人シッダルタのたどった人生を語り尽くさなければならないだろう。しかしそれを語り尽くすことができるだろうか。すでに上で引用したように、ブッダは「完全な、けっして中断されることのない鎖、因と果より成る永遠の鎖としての世界」に目覚めた人とされている。永遠の鎖を理解し体得する解脱という理念はそもそもこの点に問題をはらむだろう。人ができるとすれば、解脱への道程の概略を示すことだけである。ヘッセがその概略の骨組みとするのは、仏教の経典に語られた重要概念とそれにまつわる伝承ということになる。経典に説かれているのは、人間の生に困難や苦しみをもたらすのは人間の煩惱である。愛欲・生活を営むときに人が避けることのできない食欲・棄てきれない虚栄と悪徳・そして子や家族への愛着などである。それらが人を困難に導きさらに苦しみを生じさせるのである。

シッダルタの選り取って進む道は、それらをすべて避けることなく受け入れて味わい尽くすという道である。第二部は、カマラ・小児人種の下で・輪廻・河のほとり・渡し守・子・「オーム」・ゴヴィンダの八節で構成される。カマラ・小児人種の下で・輪廻・子の四つの節で、煩惱の限りを味わい尽



くすさまが語られる。煩惱から抜け出るために煩惱の深みにはまるさまが語られ、古代インドにあった輪廻という考え方に現実的な姿が与えられる。批評家によれば、ヘッセは、「インドの僧が儀式のとき同じ文句を三度ずつくり返して唱えながら、それに合わせて足踏みの調子を整えるやり方を、文のリズムとしてとり入れたのだ」という。たたみかけるその文体が、本来記述の困難な解脱へ中央突破する道程を読者に沁みこませていく。記者は、「調子は一点のたるみもなく張っていて高い。この調子が芸術的にはこの作の生命である」と言う。この文体によって、読者は煩惱からの離脱への歩みを納得させられていく。

河のほとりで暮らし、時とともにすべての物を流し去る河を見つめて、自然の生成消滅のすべてを理解し、渡し守として旅人を彼岸へ渡す営みのなかで、人それぞれの人生が巡り往くすべてを了解していくさまが語られる。そして、「オーム」の節には、解脱したシッダルタの悟り、われわれが思い抱くことの希なたくさんの方に沁みる数々の意味深い言葉が、見事な文章で語られる。ここでそれらを書き写したいと思うけれども、作品のなかでヘッセの語り全体に臨場して味わうことに遠く及ばないだろう。

小説には最後に幼いときからの友で仏弟子となったゴヴィンダが登場して、目の前のシッダルタが、ブッダにひとしくあらゆる人間の生き方を体現した覚者として在ることを

感得する場面が描かれる。それは、解脱という理想の成就、すなわち一つの奇跡の記述である。

この最後の節は必要だったか、懐疑的に物事を考えるわたしは少し疑問に思う。それは、ここまでの引用文にとり上げなかった事柄、特に「オーム」の節の了解にも関係することである。それを次に考えよう。

\* \*

ここからは、この作品に現われているヘッセのゴータマ・シッダールタ理解を考えてみたい。上で引用してきた文章をよく吟味すると、古代インドのバラモン教という言葉で代表させることのできる伝統的な宗教思想とゴータマの思想との差異が区別されていない、と思う。ヘッセの文章はそれを問題にすることを無効にするほど迫力あるものだが、冷静に哲学的に考えることもまた必要である。

ヘッセは、第一部でシッダールタに、「自己の最深の内性にある真我(アートマン)をわたしは求めた。梵(ブラフマン、宇宙の根源)をわたしは求めた、あらゆる殻の核心、真我、生命、神性、究極なるものを探り取ろうとしていた」と言わせている。そして、解脱に至った第二部の終局でも、真我という言葉を出して上の文にある「究極なるもの」に至ったように書かれている。

ところが、原始仏典中の『ブッダのことば』(中村元訳)

で、ゴータマは、「アートマンは存在するか否か」や「宇宙は永遠か否か、宇宙は有限か無限か、魂と肉体は同一か否か、……」というような超越的な問いに答えなかった。さらに、「〈意識は条件から生起し、条件のないところに意識は生起しない〉と繰り返し、さまざまな方法で説かなかったか?」、  
「意識は、物質を手段とし、物質を対象とし、物質に依拠して生起し、喜びを求めて成長し、増大し、発展する。物質の代わりに感覚・認識・意識に関しても同様である」と言っている。20世紀のスリランカ生まれの僧であった W. ラーフラ（著書『ブッダが説いたこと』）は、「物質に対立する自己・魂・あるいは自我、永続的・不変の精神は存在しない」、「意識は、物質と対立関係にある精神と見なされるべきではない」と解説する。ゴータマは、人間の意識によって真我そのほか超越的な理念へ到達することを断念したのである。

二つを比較すれば明らかに、両者は哲学上重大な点で一致しない。作品中でヘッセが到達した了解は、この重大な不一致を覆って同一とするものである。わたしは、ヘッセの態度は、カントが『純粹理性批判』で論じた超越的な理性の運用を踏み越している、と思う。人間の理性はヘッセが力を尽くして記述したような思い・想念 … などを思い浮かべることができるけれども、そういう理想すなわち解脱は、ヘッセの言う此岸で有限な人間の能力によって到達することはできない、と判断すべきなのである。それが、原始仏典に記述さ

れたゴータマ・シッダールタの超越的な問いへの「不答」の意味だ、とわたしは思う。

ヘッセと同じくキリスト教世界の人である文化人類学者レヴィ=ストロースも、「仏教には彼方の世界がない。すべて根本的な批判に帰着するが、人類は批判が永久に可能であることを示すはずがないので、批判の窮極において、ブッダは物と存在の意味の拒否として覚るのである」と言う。ゴータマ・シッダールタは、物と存在の意味について最終的に答えることはできないと悟り、その問いを問い続けながら生きる覚悟をしたのだ、その教説はこの根本の覚悟から出るものだ、と思う。ゴータマは、世界と人生について自身の見極めた限りのことを語り、それに基づいて人間の生の困難や苦しみからの脱却を説いた、と解釈すべきである。

ヘルマン・ヘッセの作品『シッダールタ』には貴重な思念があると思う。しかし、カント以後の哲学者や思索者たちまた科学者たちが積み上げてきた思索と知識は、現実にして人間が今日までに到達した確実な智慧であり、人があらゆるものごとを考えるとき本当に受け入れなければならない智慧である。決してその智慧を見棄てて思念してはいけない、と思う。

## 追記

ヘッセの作品は『車輪の下』しか読んだことがなかった。しかもそれをすっかり忘れていた。今回『シッダルタ』を読んで、『デミアン』も読んでみる必要を感じた。

『デミアン』は一個の独立した小説である。分量から言っても内容豊かで前奏曲と呼んではいけないけれども、わたしは『シッダルタ』へつながる作品だと思った。たまたまかけるように語られる文体はすでに『デミアン』にある。そして、会話体よりも分量が多く内省的な地の文章が続き、そこでは、主人公の外にある風景や情景が心の中を映し出すように独特なやり方で描写される。中心的な内容は人間の青春を描くものだが、老年の者が読むのでそれに誇張の感じがしないわけにいかない。

とにかくヘッセという人は自己の内心の深みへ深みへと分け入るように考えこむ人である。この傾向はわたしの精神の性向と大きく異なり、あんなふうに明解に自分の心の動きを言うこともできないし行動を選ぶこともできない。わたしがその独白に感動しきれないのはそのせいでもあった。自己の内奥を格別に問題にする心性が『シッダルタ』へと向かわせたのだ、とわたしは思う。しかし、それは哲学的な立場においてわたしとは異なるのだ。

1946年のノーベル賞授与は、「古典的な博愛家の理想と上

質な文章を例示する、大胆さと洞察の中で育まれた豊かな筆業に対して」与えられたという。ものごとを歴史的に見るくせのあるわたしは、第二次世界大戦終結直後のノーベル賞授与が当時の状況と関連があったように感じる。

ヘッセという人を全体的にとらえれば、キリスト教の宣教師の家庭で育ったことがその作品と強く結びついているように感じる。自己の心に降りて行くことを描く『デミアン』には社会が十分描かれていない。終章に近いところで語られる文章も、当時のドイツ社会の条件（フランスとは異なるようだ）をまぬがれていないことを示しているように思う。もっとも、スイスに移り住んでいたヘッセは、第一次世界大戦の時期には、ドイツ人の捕虜救援機関などで働いたというから、社会的な精神はあったのである。

中途半端な感想になったが、本文で『シッダルタ』について考えたことを変更する必要はないだろう、と思う。